

今月の論語

近き者説べば

遠き者来たる

そこに住んでいる人々が喜ぶような政治をすれば、よその人も慕ってくるようになる。

今月の帰宅放送は、東原庁舎中央校9年 金子 瑠夏さん(北多久町)です

江戸から明治へ、肥前たく幕末維新百五十年



▲内外にあるカラクリの分解(左)と内カラクリのゼンマイ(右)

(二) 火縄銃

郷土資料館には、志久家と副島家から寄贈された火縄銃が各一丁ずつあり、いずれも番筒と呼ばれる標準的な鉄砲です。右上の銃は長さ128・6cm口径13mm、左上の銃は長さ131・0cm口径12mmあります。

いずれの銃も、外カラクリに毛抜(松葉)状のバネが取り付けられ、内カラクリにはゼンマイ状のバネが組み込まれています。このバネを利用し、右の銃は三段階、左の銃は五段階の強さに調整できるようになっています。この仕組みが整えられたのは江戸時代後期と考えられます。

明治時代に入り、政府は明治五年一月二十九日の太政官布告第二八号第五則「武器取締規則」によって、民間にある武器を役所に届け出るように命じており、その際に、届け出当時の県名が火縄銃に刻印されたと考えられます。これら二丁の火縄銃には、江戸時代から明治時代を生きた証拠が残されています。

多久市郷土資料館長

藤井

伸幸

教育

教育長コラム

ちよとい話



「さみさがさせる行動」

あの二人は、とりわけ小柄な中学生だった。入学後立て続けに万引きが発覚した。罪は認められ、品物はどこにも無いし誰ももらっていない。売った疑いも出てきた。

彼らの行動の原因を探り、心情を理解したくて、彼らに歩いて行って行って話を聞いた。まず、文具と駄菓子の並ぶ店内で、消しゴムや鉛筆を1ダースごっそり盗んだという。それから、ある屋敷の石垣の前で立ち止まり、大きな岩と岩の間に細い腕をすつと突っ込んだ、その手には新品の大量の消しゴムがあった。使ってもいない綺麗な品に、必要じゃ無いけれど、盗まずにはいれない気持ちが見えて切なくなった。幼い頃から繰り返してきたと語った。

満たされない心を、盗みのスリルでごまかしていた。かまわなくて欲しい気持ち、盗みで紛らわしていた。子どもたちの問題行動の裏には、さみさがいっぱい詰まっている。

教育長 田原 優子

市民文芸

短歌 《麦の芽唱歌会 互選》

- ◆ 誰を待つと云うにあらねど壺に挿す
バラ一輪に部屋のおうら
川浪 信子
- ◆ 約束を朝に反古され新調の
服とバッグで家中歩く
本村 則子
- ◆ 此の日頃 ヨイシヨの連発 日に増して
動かぬ身体を 声で精励
福島那智子
- ◆ 麦秋の 忙しき農機の音がして
実りし麦穂刈り取られゆく
梶原恵美子
- ◆ 朝光を浴びてふうわり 粟の花
音無く散りて 雨降る気配
浦野 嘉恵

俳句 《互選》

- ◆ 牡丹に傘さし掛けて 一日留守
武富 律子
- ◆ 茶摘み唄 深夜便より 流れ来る
おおやはな 倉成 皓二
- ◆ 山も野も 深きみどりの 鉄路旅
富樫 明美
- ◆ 新緑の窓辺に開く エアメール
大石ひろ女
- ◆ 麦秋の 色の遅速を 風渡る

川柳 《多久市川柳会 互選》

- ◆ 雨漏れを受ける器にあるリズム
松下 修
- ◆ 白足袋に 梅雨の悩みを 聞かされる
井上 東子
- ◆ 新緑で 芽吹いた木立 鮮かに
田中 正春
- ◆ 値上術量を減らしてすまし顔
大谷 和
- ◆ 山奥に 生命あふれる 虫の声
西山 残月